

「第3回中之島アゴラ構想推進協議会」 会議要旨

1 日時 平成29年12月25日（月） 午後4時から午後5時10分

2 場所 大阪市役所 屋上階 P1 会議室

3 出席者

- ・大阪府政策企画部企画室長 本屋和宏
- ・ 〃 商工労働部成長産業振興室ライフサイエンス産業課長 池田純子
- ・大阪市経済戦略局長 柏木睦照
- ・ 〃 都市計画局長 川田 均
- ・大阪商工会議所常務理事・事務局長 児玉達樹
- ・一般社団法人関西経済同友会常任幹事・事務局長 廣瀬茂夫
- ・公益社団法人関西経済連合会専務理事 関総一郎
- ・国立大学法人大阪大学 理事・副学長 小川哲生
- ・ 〃 理事・副学長 吉川秀樹
- ・中之島まちみらい協議会代表幹事 岡村 修

4 議題

- ・中之島アゴラ構想の実現に向けて

5 議事要旨

川田) それでは議事に入らせていただきます。

昨年の8月に大阪大学様から中之島アゴラ構想の提案を受けまして、同11月に協議会を立ち上げさせていただきました。協議会では、約4,500㎡の土地を最大限活用した場合にどういった活用ができるかということをお説明いただきました。

その後、今年の2月に第2回協議会を開催し、実施内容とあわせて施設イメージについてご説明いただき、協議会において施設イメージの共有を図りまして、3月に基本方針（案）を取りまとめいたしました。

3月から今までの基本方針（案）策定の後、大阪大学様におかれまして現時点の具体的な内容、場所などをご検討いただき、我々事務局として、そのご検討内容を踏まえながら整理いたしましたので、まずは事務局から説明をお願いいたします。

【資料1により説明】

川田) 具体的な最終形としての拠点全体のイメージを、今回ご提案させていただいたという理解をしております。今後、具体化に向けて内容を詰めていく必要があると思いますけれど、大阪大学様におかれまして、まずどういった内容から具体化に向けて動かそうとされているのか、そのあたりのご提案がありますので、小川理事からお願いいたします。

小川) 今日、この場を設けていただきありがとうございます。

今、川田座長からお話がありましたけれど、昨年の8月に大阪大学より中之島アゴラ構想を提案させていただきました。その時の経緯を一言で復習しますと、中之島4丁目にある敷地で、大阪大学としてはやろうと思ったらこんなことができますということのリストアップしたものです。それを全部やろうとすると、協議会の基本方針(案)のように約20,000から25,000㎡の建物が必要ということで、できることならやりたい。ここで現実の話も交えながら、大阪大学としては中之島アゴラ構想の実現に向けて、どこまでうまくできるのかということを検討しましたので、検討の結果あるいはプロセスをお話して、共有して、色々ご議論していただきたいと思っております。

資料はございません。口頭で申し上げたいと思っております。

まず、大阪大学として中之島アゴラ構想を実現したいと思っているところではございますが、2021年の大阪大学創立90周年、10年前に統合しました大阪外国語大学の創立100周年の記念事業として、中之島アゴラ構想の事業の実現あるいはキャンパス再開発事業として位置付けたい、ということがひとつめ。

アゴラ構想の実現のための一番大きな問題は、財源であるという認識をしております。大阪大学をはじめとしまして、国立大学法人の財政事情は大変厳しいものでありまして、大阪大学としましては、先ほど申し上げましたように、2021年の90周年記念事業に関わることで、企業や一般、あるいは大阪大学の卒業生、教職員からの募金を充てようと、決意したいと思っております。中之島アゴラ構想実現に充てる寄付金の募集の目標額は30億円として、集まった募金の範囲内で、大阪大学としては中之島アゴラ構想実現に向けての事業を実施していきたいと考えております。従いまして、協議会でまとめた基本方針(案)を踏まえた事業規模、先ほどご説明のあった60~80億円規模という数字がありますけれども、その通り今の大阪大学の体質であるいは財力でやることはできないということでございます。

なお、その中でもできる限りの工夫をすることで、大阪大学が実施する具体的な内容としては、3月に協議会でまとめられた基本方針(案)に掲げました機能はできるだけ維持したいと思っております。社会学共創拠点、アート拠点につきましては、アーティスト・イン・レジデンス機能、即ち宿泊施設の規模を半減させるとか、他はほぼ同じような内容の実施を想定しております。また、産学共創イノベーション拠点につきましても、一部の機能を大学の本体、吹田キャンパスにあります産学共創本部等で稼働させるなど

の工夫を行いながら、中之島での基盤研究や共同研究の施設規模を半減するものの、必要な当初の機能についてはできるだけ維持したいと思っているところでございます。

募金につきましては、期間は3~4年程度を想定しております。即ち2021年が90周年でございますけれども、前年度2020年頃には募金の総額のメドが判明するのではないかと想定しております。即ち、そこから色々な手続きを進めますと、2024年度末頃に何らかの施設をつくる、あるいは事業を進めるというのが基本のスケジュール感となるのではないかと思います。

なお募金活動でございますので、30億円という目標を設定していますが、それより多くなることもあれば少なくなることもあるかもしれない、という前提。それから、集まるスピードも好調に推移して早く集まることもあれば、なかなか集まらないこともあるかもしれませんが、早く集まったら集まったで事業の推進を前倒ししていくことができるのではないかと考えております。今申し上げましたように、募金ですので、拡大・縮小、募金の集まり具合によって予定額より多いか少ないかの変動はあるかと思っておりますので、それにあわせて中之島アゴラ構想の実現をさせる規模の検討もあり得るかなということもございます。企業等からの積極的なご支援があれば、非常にうれしい。特に、合築をしようじゃないか、あるいは一緒に何か事業をやろうじゃないかということは私たちもウェルカムでございますので、そういうご議論もぜひともお願いしたいと思っております。

最後に、ランニングコストのことも色々和我々気にしております。ランニングコストを賄えるだけの収益というのをアート等々で、ということは考えにくいということがございますので、大阪市の土地の借地料が有償になった場合は、大学として中之島4丁目に出ていくのは非常に厳しいと認識しております。今の国立大学法人の財政事情ではランニングコスト、日々の生活でいっぱいいっぱいということもありまして、大阪市所有の土地、約4,500㎡につきましては、是非とも無償で貸与いただけるように大阪市には特段の配慮を改めてお願いしたいと考えているところでございます。

大阪大学としまして、今考えているところはそういうところでございますので、ご相談とご議論していただければと思います。以上でございます。

川田) ありがとうございます。大阪大学がまず現実的にできるところをある程度お考えいただいたご提案でございますので、それを前提にしながら議論していただきたいと思っています。

これに関連しまして、アート関連ですので、隣接地の新美術館の検討状況を美術館担当からご説明させていただきます。

【資料2により説明】

川田) ありがとうございます。新美術館、2021 年度完成が目標ということで、これをある程度活かしながら、隣接地のアゴラ構想の施設計画、これは先ほど小川理事から説明があったように募金額によりますが、そこは並行して進めていくという理解をしていきたいと思います。

それではこれから意見交換を行いたいのですけれど、質問やご意見ございましたらどうぞ。

関) 中之島が大阪大学発祥の地ということでございますけれども、それ以外の観点で中之島を選定された理由や、このエリアに期待していること、そのような何かがありましたら。

それから2点目に、大阪大学の中でもこれまで吹田やその他色々ところで産学連携の取組みを進めてこられたかと思いますが、そうした中でこの中之島アゴラ構想の役割や位置づけはどのようなものになるのかなど。

3点目でございますが、大阪の中にはうめきた、すでにナレッジキャピタルがございます。そういった他の産学連携の拠点もあるわけですが、そういう中で、アゴラ構想が実現した時には他の拠点との連携をどのように図ろうとしていかれるのか、その点についてお考えがあれば教えていただきたいと思います。

川田) それでは、今3点ありましたけれど、よろしく願いいたします。

小川) まず1点目は中之島という場所についての私たちの思いですけれども、ご存知かと思いますが、まず発祥の地であるということは、動かしがたい事実でございます、私たち、「中之島4丁目」と聞くだけで熱くなるというようなことが第一でございます。それはそれで、中之島4丁目に大阪大学がもともとあったわけですが、今は北摂に移って、中之島センターという建物だけがございまして、そこを今、社会学共創活動の拠点として使っております。それをもちろん活かしながら、アゴラ構想というのは文化・芸術・学術・技術というものをやっていきたいということ。それから、この構想の中のアート拠点は、すぐ隣に大阪市の美術館がある、あるいは国際美術館もあるということで、大阪大学は総合大学の中でも文学・芸術系が強いということがありますので、美術館との色々な連携、教育も含めた連携がやれるんだったら大学が出ていくしかないんじゃないか、というのがひとつございます。

それから産学連携とも関係するのですけれど、産学連携というのは企業側が目的をもって大阪大学に来ていただいて、一緒に共同研究をやりたいという場合は、私たちのロケーションが離れていても来ていただけるということがあるのですけれど、とにかく困っているのだけれど誰に相談していいのかわからない、というようなことも多々

あるかと思えます。大阪市の中心地に行きますと大企業ばかりでなくて、色々な規模の企業がいらっしやる。そういう方々にふらっと来ていただいて、大阪大学がどういう技術をもっているか、どういう知恵を持っているか、ということを知っていただきながら、大阪大学とどんな連携をしようかということの相談ができる場としては、やはりまちの中にあつた方がいいという理由を強く感じています。そういう意味でワンストップ拠点みたいなイメージを持っておりませんが、そこに来ていただければ、大阪大学の技術やシーズを見せられる、それから市民あるいはまちの中の企業さんのニーズをアンテナ機能として入れることができる、それからコーディネーションをできる人たちをちゃんと揃えておいて、大阪大学は非常に大きな組織ですので、色々なことをやってらっしゃる先生がいる中で、それをどのように組み合わせると企業の中でソリューションになっていくか、ということと一緒に考えていくようなことを考えております。そうしますと、北摂の方に単に構えて、来るのを待つというだけではなくて、まちの中に出て行って皆様と一緒に新しい価値創造をやるには、中之島4丁目という場所が最適なんじゃないかというように思っております。産学連携を、本格的に腰を据えてやるには、それなりの敷地がある北摂郊外がいいかもしれませんが、最初のスタート、あるいは何をやるのか、何を研究するべきなのか、どういうやり方で価値創造するのか、というのを社会と一緒に考えていくには、やはりまちなかがいいのではないかと考えております。

それから、うめきたもありますが、私たち中之島4丁目産学連携絡みで期待しているのは、大学という教育機関があつて、アートが参画することは産学連携にすぐに結びつかないかもしれませんが、教育機関がしっかりあつた上での産学連携をやりたい。うめきたは、そこにどこか特定の大学が来るという話はないのではないかと考えております。その点中之島4丁目は私たちの故郷でもあるということもあつて、大学という基盤をしっかり持った上で、それをベースとして産学連携をやっていくという意味で、うめきた等々で展開しようとしている産学連携とは少し違った感じの、総合的な形で産学連携を進めていきたいというのが、大阪大学の思いでございます。ロケーション的にはある意味では近いですがけれども、いわゆる本当の梅田、大阪駅前というのと、大阪市の中心、元々伝統のある中之島という部分とのすみわけというの、社会と一緒に考えながら、というように思っております。

吉川) 追加いたしますと、4丁目の西側の土地に、もし再生医療の拠点ができましたら、そちらとも連携したい。再生医療になりますと大阪大学が主導権を取れる領域ですので、その部分と連携して、それに関連する企業に中之島の方に入つていただいて、産学連携を推進したい。

それから吹田キャンパスにも産学連携の建物があるのですが、今は順番待ちをしている状況になっているということもありまして、窓口機能だけではなくて、新たな研究

室のためにも、大阪市内のキャンパスというものを整備したいと思っております。

川田) うめきたの場合は、特定の大学というよりも、大学と大学がひとつの研究室に入る、いわゆる大学間が連携をする、あるいは単独の企業ではなくて、企業間で連携する、その大学間連携や企業間連携で新しいものを作っていくという感じですので、確かに中之島の場合は少し違うかなと思います。

関) 大変よくわかりました。ありがとうございます。

1点捕捉で教えていただきたいのですが、産学連携の共同研究スペースを中之島でということ、キャンパスは北摂ということですが、先生が普段教えておられるところと離れてしまう、そういうことはないのでしょうか。

吉川) 企業の研究の内容によると思います。大阪市内でできる共同研究もあるかと思いますが。例えばコンピューターで、室内で研究するものとか。吹田キャンパスでないと大型機器を使う研究は難しくなるかと思いますが、その分野とか企業によって、中之島の中で教員が常駐してできる研究もあると思います。そのすみ分けが必要だと思います。

小川) 大阪大学の産学連携は、「Industry on Campus」というキャッチフレーズがございまして、企業の方々にキャンパスあるいはラボスペースに来ていただいて、教員と一緒にやっていくというスタンスであります。中之島も私たちとしてはキャンパスでありますから、来て、そこで一緒に共同研究をやれるような、今吉川理事がいましたように。そのときに、教員側から見たときに、自分の拠点はその場所から離れているかどうかというのは、それほど問題ではありません。そもそも今吹田キャンパスの中でも、自分の研究室の中でそのまま共同研究をやっているわけではありません。共同研究は言いましたようにあるスペース、近いとはいえ教員も企業も研究スペースのある建物に出かけて行ってやる、そこは同じこと。

それから、やはり大学の先生方もまちに出かけて行って、より企業の方と触れ合うことによって、社会のニーズを知りたいという要求が非常に強いこともあって、吹田・豊中・箕面が田舎とは言いませんけれど、こっちの方が都会ですよね。こっちに来た方が皮膚・五感を使って、企業の方々と接することができるというのが、皆さん思っているところでございます。

川田) 先ほど小川理事からのお話で、企業の方のご支援、大阪大学として今回産学連携をしていただくのですけれど、それとあるいはそれ以外のところも企業の方のご支援を期待していらっしゃる。こういう産学連携のテーマを、今後まちなかでどういうものができるのかを、大学側あるいは経済側・産業側ですこし深堀をしてやっていくというとき

に、次なる展開につながると思っておりますので、引き続きこういう場を含めて説明できればと思います。

岡村) 私からは大きく2点ございます。1点目はアートと新美術館関係でございます。私どもはまちづくり構想というものを作っております、4丁目はミュージアムコンプレックスゾーンと位置付けておりまして、今回の新美術館、アゴラ構想については、非常に我々の構想の実現に向かっていていただけるということで、非常に期待しているところでございます。

アートに関して基本的な質問となって恐縮ですが、美術館と阪大の連携というのは具体的に、例えば資料の中で美術館との共同研究とありますけれど、具体的な例示といえますか、こんなことを考えているということがございましたら、教えていただければと思います。

それから、アートの関係でもうひとつございます。アーティスト・イン・レジデンスが作られるということですが、例えばこういったものがどのような具体的な効果をもたらされるのか、イメージがあれば教えていただければと思います。ここまでがアートの関係でございます。

2点目が社会学共創の件でございます。私どもまちみらい協議会は阪大のCOデザインセンターと以前から連携をさせていただいております、中之島での社会学共創の取組み、こういったものの将来期待されるもの、やろうとされているものがございましたら、教えていただければと思います。

小川) まずひとつめでございますが、新美術館もあり、国際美術館もあるということと、この大阪大学中之島アゴラ構想のアートの関係でございますが、先ほど申し上げましたように、大阪大学は文学研究科を始めとして、学問としてのアートの専門家がいるだけではなくて、その教育をやっているというところ一番の特徴かと思っております。即ち、学生もいる。教員もいれば学生もいるところで、私たちが今色々考えているところは、芸術系・美術系の何らかの組織を中之島に常駐できないかということまで含めて。できないとしても学生たちが美術館とアート拠点と両方股に掛けて色々な活動しながら、美術館のプラスにもなるし、学生の教育にもなる、ということをおもっております。芸術学の先生にお聞きしても、単に人里離れた所にこもってやる分野もあれば、社会の中で人と接しながらだからできない分野のアートもあるということで、まちなかであって、美術館のキュレーターの方々、美術館に来たお客様たちと組んで、新しい芸術がでてくることもあって、それを期待しているというのがひとつ。

それと美術館は美術館で立派な建物が建つのですが、その横に例えば私たちの建物が建てば、相互的に色々な事業ができるのではないかと考えております。私たち、お金のことは問題があるのですが、大・中・小のホールみたいなものは作ってい

きたい。そこを使って美術館のイベントの学問的な説明を行う講座を開催したり、そんなことも可能かなと考えているところでもあります。具体的なことはこれから詰めていくわけですが、私たちとしては美術館との連携というのは非常に重視しているし、お互いにプラスが色々あるのではないかと考えております。

もうひとつ、アーティスト・イン・レジデンスでありますけれども、これは宿泊施設も必要、制作のためのスペースも必要ということで、それなりのスペースが必要なのでお金とすぐ色々絡んできてしまうのですが、世界的に著名な人に来てもらいながら、そのアーティストたちが大阪市あるいは中之島という地域を感じた上で色々な制作活動をやっていただくというところが一番の特徴かと思えます。その時に隣に美術館がある、あるいは大阪大学の学生がいる、あるいは大阪大学の専門の先生がいらっしゃる、そういうものの色々な相互作用、化学反応と言ってもいいかもしれませんが、そういうものが新しい芸術に展開していってくれるのではないかと。これは結果としていえば、大阪大学の知名度や中之島の知名度、ひいては大阪の知名度アップ、ブランディングにアートの面から寄与していけるのではないかと考えています。

それから、社会学共創でございますが、社会学共創はすでに中之島センターを拠点として使っております、市民の人たちとの色々な講義がすでに始まっております。そもそも思い出しますと、北浜に適塾がございまして、懐徳堂の碑も残っております、適塾の資料を私たちものすごくたくさん持っております。その資料を活かしながら、大阪大学の元々の立ち上がりの経緯で社会とのつながりが非常に強かったということもあって、社会とのつながりとして適塾が例えばひとつがあって、市民と、あるいは府民とつながっていく。そうしますと適塾が絡むとなると吹田市とか豊中市よりもやはりこっちの方が間違いなく近いし、中之島4丁目で色々なことをやった後に歩いていけるくらいの距離にあるわけですから、そういうのを活かしたこともより積極的にやっていけるのではないかと期待しております。市民の方々が色々な意味で北摂よりも来やすいというのももちろんありまして、一方通行ではなくて相互通行の社会学連携をより強化できる、そんな意味で中之島4丁目というのは社会学にとってもいいのではないかと考えております。

吉川) 社会学連携で追加ですが、道修町という薬のまちがあるということも。中之島に医学とか薬の展示場とか、小学生・中学生から勉強できる施設がないんです。医学とか薬学のイベントや展示する場所が。中之島センターの1階に一部できる場所もありますが、中之島センターを含めて拡大すれば、一般市民や学生、小学生・中学生も医学や薬学を勉強する場として非常に望ましいのではないかと考えております。道修町、適塾も含めて。

川田) ありがとうございます。事例を挙げていただいたことでイメージも湧き、よくわかり

ました。

その他、ご意見がありましたらどうぞ。

児玉) 都心でのイノベーション拠点を樹立させるということは、これから非常に重要になってくると我々も思っております。目先ではなくて、少し先を見据えた大きな視野で何をなすべきか、ということを見極めようという動きは、皆様の中でも出てきているのではないかと思います。都心でこそ、大きなテーマを様々なプレイヤーが集まって議論できるのではないかと。この意味で産学共創イノベーション拠点というのは、非常に重要であると思っております。この産学共創イノベーション拠点をできるだけ拡充・充実させていただきたいと思っております。そうすることは、ある意味で募金にもつながっていくのではないかと思っております。これが一つ目で、二つ目はお教えいただきたいのですけれど、例えば30億円の募金で建設された場合の規模と、ランニングコストをどうまかなっていくのかというあたりをお教えいただければと思います。

小川) 30億円だと80(億円)分の30(億円)というくらいなのですが、多分、精一杯建てても延床面積10,000㎡以下になるのではないかと思います。そのような面積の中でアートと産学共創をどのようにやるか、どこまでやれるかというは、一応色々な案を私どもで作っておりますけれども、機能としてはひとつひとつが小さくなくても、できるだけ全部残していこうということで今考えております。

それから、ランニングコストは、土地のことは別にいたしまして、建物の大きさに比例したものとなります。それを自動的にといますか、ゼロから生み出していくことも考えていく必要がございます。例えば産学連携ですと、共同研究あるいはワンストップ等々をやるときのスペースを、企業の方に使っていただくスペースチャージをどうまわすかということもあるかも知れません。ただアートの部分でどのくらいのプロフィットになるのかもどうか、色々考えているところございまして、アートと教育をマッチングしたスクールなんかでもできるのではないかと思っておりますが、大阪大学単独でできるかどうかも含めて、まだまだ青写真にまでもいかないところであります。

ランニングコストのところは非常に気になっているところでありまして、そこも含めて色々企業の方々と連携の相談に乗っていただければと思っております。

吉川) 現在、吹田キャンパスの産学連携ではスペースチャージをいただいております、それで産学連携のテクノアライアンス棟というのを維持できておりまして、同じように入っていただく企業にチャージをいただきたしまして、ランニングコストは生み出していきたいと思っております。

30億円なのですが、80周年事業を10年前に行っておりまして、豊中キャンパスの大阪大学会館の改装をしました。そのときに集めたのが13億円です。従いまして、今

回は2倍以上あるのですが、80周年事業は1年半で集めましたので、4年間かけて何とか集めたいと思っております、ぜひご支援をいただきたいと思っております。

川田) ありがとうございます。

これは個人的な意見になりますが、できるだけイメージがわかりやすい、募金をすればこういうものができるというもののイメージ化は大事かと思っております。大阪市でも募金をするとき、ソフトのものではなかなかできないのですけれど、ハードのものではできるだけ絵姿を見せて、もちろん考え方とあわせてですけれど、示していただくことが効果的かなと思っております。これは個人的な意見として聞いていただければと思います。

廣瀬) アートについて質問が3つと、それから規模についての話をしたいと思っております。

はじめに、アートについてこの施設で何をするのかということで3点伺いたいと思っております。一つ目は、展示方法が随分と変わっていますが、どのようにイノベーションしようと考えているのか。新しい芸術を創造していこうという話なのか、それともアートと産業なり学術なりを融合していくという話なのか、そのどちらもやっぺいこうという話なのか、焦点の当て方について、ポイントを教えていただきたい。

2点目は、ホールが3つあるということですが、それぞれ何をするのか。アートに関するシンポジウムとかをイメージされているようですけれど、例えば舞台芸術、そういうものをなさるのか、それともホールとしての仕様はMICE的なものになるのか。ホールの位置づけはどうなるのか。

3点目は、大阪大学は総合大学ですから、芸大をここに持ってくるのと何が違うのかという点についてお伺いできればと思います。

次に、規模についての質問ですけれど、先ほど60~80億円が30億円になった場合に、機能はそれぞれ残したいというお話がございました。我々産業界からすると、全体的に規模を縮小すると全部中途半端になってしまっぺ、どれもできなかったということになりはしないかという危惧もあります。どちらかというとメリハリを効かせた方がいいのではないかという気もするのですけれど、もしメリハリを出すとする、どこを中心に残して、どこを大胆にカットしていくのか。これについてのお考えを教えてください。

小川) まずアートで何をするかというポイント、一番焦点を当てているのは、やはり市民・社会と組んだときのアートを作っぺいきたいというところですか。先ほど申し上げましたけれど、山奥のどこかにこもっぺやるのではないアート、まちなかにいるからこそできるアートというのをやっぺいこう、ということでございます。そういうことをすでに始めている学内の組織というのもありまして、それがまちなかに出るだけではなくて、

隣に美術館があるというのがうってつけの環境という位置づけになります。まちの中で学生と市民と、あるいは広い意味では社会とが一緒になって、それに先ほどのアーティスト・イン・レジデンスもありましたけれど、外からの専門家も入ってきて、学内の専門家もいるというところが一番のポイントであります。

2つ目のホールのことですが、ホールは3つほしいというはお金の許す限りの話ですが、機能がだいぶ違っていることをイメージしております。ホワイトキューブといいますのは、いわゆる展示場、展示に使うようなスペースでありまして、小ホールはそのようなイメージをしております。中ホールはブラックボックスといわれて、これは壁とか天井・床が黒くなっています、これはまさに舞台芸術のホールです。ホワイトキューブは、どちらかという置いてあるものですから、動きがないというもののアートなのですけれど、ブラックボックスはスタジオでありまして、ステージもありまして、そこは動きのあるような芸術というのをやる、そんな役割分担は考えているところであります。

それから芸術大学とどう違うかというのは、まず私たちは総合大学であるということでありまして、例えば文学研究科の中の美学の専門科の先生あるいは学生でありましても、すぐ隣には工学部がある、医学部があるということが関係あります。あるいはそういう意味で言いますと工業デザインとかいうことも関係あるわけでありまして、アートといいますが広い意味で言いますとデザインも入ってきます。例えば医学の中の医療機器や関節ですとか心臓ですとかというのもデザインの範囲に入ってきますので、それをアートというか定義は決め付けなくていいと思うのですけれど、そういうことも踏まえて展開できるのが総合大学での芸術の強いところではないかと期待しているところであります。

最後に 80 億円を 30 億円にするとどれも中途半端になるのではないかと、私たちも一番それを気にしている部分でございまして、今のスタンスは、アート系はできるだけ削らない。どちらかという割を食うのは産学連携で、そうと決めているわけではないので私のイメージですけれど、産学連携部分は企業様と色々まだやっていると。色々な議論やあるいは協力を。ところが、アートはなかなか産業界となじまないのではないかとというのがあって、アートを第一に守ることが大学の最初の役割かなという気持ちが私にはございます。一方でまちなかに美術館ができてアート関係の学生や教員が来て、ということになったときに、そういうのこそ文化だということを企業の方にもご理解いただきたいというのもあるのですけれど、まず私たちこそやらないといけないのはアートかなと思っていて、その辺はメリハリをつけたいと思っております。ただ、30 億円というのは目標額でありまして、実際どうなるかわからないので、それを見合いながらこのメリハリを考えていきたいと思っておりますし、そのプロセスで産業界との関係もより具体化しながら考えていかなければならないと思っております。

廣瀬) 大ホールについては何かございますか。

小川) 大ホールはあるといいなど。といいますのも、美術館に大ホールがないので、そこで相互性があるといいかなと思っておりますが、それもどれくらい募金が集まるかにかなり依存しております。

川田) ありがとうございます。

関)) アートについて1点だけ。ご説明を伺っていたら、市民の方々あるいは美術館への来館者の方、あるいは学生、色々出てくるのですが、アーティストになると拠点が海外のアーティストとなっていて、大阪にも色々なアーティストの方がおられるのですが、いわゆる大阪を中心とした関西圏のアーティストの方々との関わりというのはいかがでしょう。

小川) 海外に限っているつもりはないですけれども、大阪エリアで申し上げますと、特に静的なアートではなくて動きのあるアートで言いますと、京阪のなにわ橋駅にアートエリア B1 というスペースがありまして、そこで色々なアート活動というのを大阪在住の芸術家と一緒にやっております。あれは小さいベンチャースペースみたいでありますけれど、それを恒常化していくというのに中之島4丁目がいいのではないかと考えております。大阪のアーティストが元気になるというのも、それが大阪のブランディングになっていくのではないかと思います。

川田) アートの話がでているので、経済戦略局長から大阪大学に期待することなどあれば。

柏木) 興味深くご意見を聞いておりました。医学博士という形で副学長をやってらっしゃって、指揮系統など含めて大変ご苦勞なさってらっしゃるなど、ひしひしと感じました。まずはそういう意味でも、大きな広い意味でのリスペクトをさせていただきたいなと思っております。どうもありがとうございます。

大阪市経済戦略局より2点、感想を述べさせていただきたいと思います。お金の話、当初80億円であったものが30億円を目指すということですが、10年前の80周年のときは13億円という話もありましたが、おそらくこの10年間で再生医療の環境は大きく変わってきているんだろうなと思っておりますし、製薬企業が皆様方大阪大学に注目している熱い視線も変わってきていると思いますので、これはぜひお金に関しては道修町ともしっかりと連携いただいた上で、まずはファンドという形でしっかりやっていただければと思っております。お金の部分につきましては、先生方から熱意と新し

い研究分野の部分での先行期待という形で、先物的な形で対応されるのかなと思って、しっかりと応援させていただければと思っております。これがまず1点目でございます。

2点目はアート関連で、「まちなかの」ということにつきましては非常に共感を持つ部分かと思っております。確かに先ほどお話がございましたけれど、芸術大学でいいじゃないかというご意見もおっしゃる通りだと思ったのですが、リベラルアーツという形からアートをご覧になっていただいて、ここから新しい何かを生み出していくアートということを考えましたときに、単なる絵画・芸術・デザインというのではなくて、広い意味での新しい視点をお持ちでいらっしゃるということは、非常に大きな期待ができるのではないかと思っております。イノベーションにしても、まちづくりにしても、最終的にはそれを担う人間をつくるということが本来の目的であって、それはお医者様をやっていらっしゃるからこそ余計にそう思えるかも知れませんが、人間というものの価値・可能性を求めていくという拠点がこの中之島にできるということは、非常に大きな話になっていくのではないかと思っております。また、この中之島の部分でできることという話がございますし、その中には色々な非常に大きな可能性を秘めた、日本の近代化のいわゆる出発点でもあるのではないかと、そこがここにひとつ注目をさせていただいて、まちづくりと、そしてひとつづくりと、そしてさらに新しい最先端の技術のイノベーションをここに全て凝縮するということが、大阪市経済戦略局としても非常に期待できる部分であると思っております。

そして、さらに2025年度になりますと万国博覧会の誘致もやっておりますが、これなどもまさにAIだけではなくて、再生医療も含めたアートの部分、いわゆる人間のアートの部分につながってくるのだと考えております。ぜひそういう意味でも協働する分野が色々あるというように考えますと、先生方で、そして大阪大学様で新しい色々ご提案いただきまして、これをもってぜひ行政としても協力させていただきたいというような形で、一緒にお話し合いを続けることができれば、また色々な意味でも展開が期待できると思っております。ということで、私ども経済戦略局からはしっかりとエールを送らせていただきたいと思います。

川田) 募金はアゴラ計画をしっかりとご提示されて、広く集めていただければと思います。

今までのお話を聞いていまして、一定、大阪大学様として産学連携・社学連携・アート拠点の形成に踏み出されるということで、我々としてはできるだけのものを作っていただけたらいいなという感じはするのですが、それには経済界の皆様からのご支援も必要だと思いますし、我々自身も、先ほど冒頭で小川理事から土地のお話をされていましたが、そこは全く白紙ですから、そのご提案をさらに深めていくとしかお答えできないのですが、いずれにしても全体として約4,500㎡の部分で、大阪大学が中心となって機能を発揮していくということに向けて、さらに我々、議論をしていきたいと

思います。

その中で今回、マグネットとして、大阪大学されようとしていること、我々は期待しているのですが、それに関して民間の企業様からの、大阪大学が腹をくくられて、これから期待感がでてくるのかなど。それによって具体的な支援のあり方などがでてくるかと思っているのですが、その辺りの感覚について、関専務理事、いかがでしょうか。

関) 企業の声と言えるかどうかわかりませんが、私どもで想像しておりますのは、こういう機能が中之島にできれば、中之島に集う層もぐっと広がる。若い人もそうですし、アーティストもそうですし、あるいは大学と連携を求める企業の方々もそうでしょうから、そういう意味では中之島が持つ吸引力がまた違ったものになってくるというように期待いたします。

たまたま今、なにわ筋線の整備構想も動き出しており、また夢洲とも関連しますが中之島線の延伸の話もあります。そういう意味で、色々な交通インフラの整備が将来さらに進んでくれば、企業の中の島に対する注目度はさらに高くなってくるだろうと思っております。

川田) 大阪市として、今、なにわ筋線の鉄道計画が 2031 年度開業目標としております。これは大阪大学様の構想がなくても駅ができるということで、民間企業の方々も周辺開発に関して駅に重みをお持ちであるかなというのが私の感覚です。それに今回、アゴラ構想がいよいよスタートして、目処的に 4 年の期間で資金を集めるということですが、そういったひとつの目標を示されると、周辺まちづくりの民間のマインドにかなり響いてくると私も思っていますので、ぜひとも我々自身も事業のスキーム、いわゆる民間の開発スキームの中にも、色々都市計画でインセンティブがありますので、その辺も複合的に勘案しながら、大阪大学アゴラ構想の意向に発展できるよう、経済界の皆様と研究しながら進めていければと思っておりますので、ぜひお願いしたいと思います。

そういうことを我々もやっていきますので、民間の開発の環境を整えば、ぜひ大阪大学様も自ら動き出せるように積極的に検討していただければと思っておりますけれど、いかがでしょうか。

小川) 私たち、今精一杯が 30 億円という数字でございますけれど、死ぬもの狂いでやります、という覚悟を決めたということがここでお話できることでありますけれど、実際 80 億円あると全体ができる中で半分以下の額というのは、悔しい面ももちろんございます。そこを大阪の経済界等々と組んで次のステップで何かできないかというのを、ぜひ相談に乗っていただきたい。あるいは一緒に議論をしたいと思っております。

先ほどご質問がありましたけれど、80 億円を 30 億円に小さくしたときに、どの辺を

一番削っていくかというのは、例えばラボのスペースでございます。そういうところで、色々と産業界側のご支援等々もいただきながら、構想の規模が100に戻っていくよう、ぜひご協力していただきたいと思っております。

川田) ありがとうございます。引き続きこの協議会のメンバーで研究して進めて参りたいと思っておりますので、よろしくをお願いします。

吉川) 募金活動を1月から始めたいのですが、ご了解いただいたということでよろしいでしょうか。

川田) それでは、今日のお話で、大阪大学様の30億円を目標とした募金活動をスタートさせるというお話がありました。アゴラ構想を推進するための募金を1月から開始されるということについて確認させていただきました。

これからも色々な議論を引き続き行っていきますけれど、来年度以降、募金状況を踏まえながら、引き続き議論をしたいと思っておりますし、その過程でスケジューリングももう一度行いたいと思っております。

岡村) 募金活動を行っていただくということですが、私ども中之島まちみらい協議会は29社の会員に入っていておまして、適宜集まって会合を行っております。例えばそういう場にお越しただいて、大阪大学様から募金の内容についてご紹介いただくとか、そういったこともご対応いただけると思ってよろしいでしょうか。

吉川) ぜひ訪ねて説明させていただきたいと思っております。

岡村) ありがとうございます。

川田) 具体的な募金の内容でやるということは、いつごろ表になるのでしょうか。

吉川) 1月からホームページに90周年・100周年記念事業をスタートするということができます。それでスタートしたいと思います。

川田) 今日はこれで確認したんですけれど、できるだけ派手にといいですか、人目に触れるような形でやっていただくと、1月から動きやすいなと思っております。

今日は本当に活発なご議論をいただきましてありがとうございます。

事務局) それでは、これをもちまして、本日の議事を終了させていただきます。

次回の日程につきましては、あらためて調整させていただきます。
皆さま、本日はありがとうございました。